

# 研究資料

## 法華堂地藏菩薩像に就いての一考察

堀池春峰

### 一、序言

法華堂内陣には、乾漆・塑像群像十四軀の中にあつて、東南・西南隅に木彫の不動明王、地藏菩薩像が安置せられている。これ等二群像は他の乾漆・塑像群に比較して、その像高も低く、所謂客佛的存在として、一般に餘り關心がはられていない現状であるが、幸にも東南隅の梵天と持國天の間隙に安置せられている不動明王及二童子像は、應安六年十月(A.D.1373)に大佛師清玄法橋によつて造像せられた事が、制多迦童子の足杓の墨書銘に依つて知られ、南北朝時代に於ける奈良佛師の古典的な作風を顯著に示す優品として、學界に著明である。

然し不動明王像に比して、この地藏菩薩坐像に至つては、不幸にして造像年代を明確に決定する資料が発見されぬ爲に、様式論上より種々の學說があり、推定が行われている事は、蓋し當然の歸結と云わねばならない。即ち東大寺大鏡の筆者が注目して以來、鎌倉時代盛期、中期説と、唯漠然と鎌倉時代のものとするもの、或は鎌倉時代の雄健な作風を残している不動明王像一具三像が、實は應安六年のものであると云う潜在意識によつて、この像も應安前後にその造像の絶對年代を求めておられるものもある。更に舊藥師院所藏『法華堂要録』寛正六年の條に「悔過ト地藏トノ間ニ大般若櫃六合ヲ置也」の記録が安藤更生氏により指摘せられてより、寛正頃には法華堂に安置せられていたとし、恰も

客佛的佛像であるとする説も生じて來たのである。これは當堂には乾漆群像を主体とする九軀の尊像の外に、平安時代初期以降諸堂の退轉によつて移入をみた吉祥天、執金剛神等の塑像が數體安置せられているという先入觀によつて、かかる論説も生じるに至つたと思われる。

然し大體この地藏菩薩像が鎌倉時代の造像であるとする學說が支配的であると云う事が出來るとしても、猶明確なる年代決定は未解決のままでであると云う現状と申さねばならない。ここに東大寺文書に散見したこの地藏菩薩像に関する資料を提示して、拙論を述べて大方の御叱正を仰ぎたいと思う。

### 二、地藏菩薩像の形相と地藏講

地藏菩薩が大地を司る佛として信仰をみた事は東大寺盧舍那佛に塗金の折、この像に祈願したと傳え、講堂には千手觀音像の脇士として一丈の像が安置せられたが、<sup>註一</sup>以後末法思想の影響によつて藤原時代以降に於ては益々流布盛行をみるに至り、加えて淨土思想の欣求によつて、極樂淨土への引導の師としての信仰に變化するに至つた。即ち弘仁時代頃の地藏菩薩像が左手屈臂して寶珠を持ち、伸長せる右手は與願印をむすんでいる形相に對して、藤原時代以降は専ら右手は屈臂して衆生引導を象徵する錫杖を持つものが甚だ多い。

東大寺に現存する法橋快慶作公慶堂地藏菩薩立像、嘉禎三年霜月法橋康清による念佛堂(舊地藏堂)本尊地藏菩薩坐像、知足院地藏菩薩立像等は、鎌倉時代に於ける地藏像の中にあつても秀作の部類に入る作品である。法華堂地藏菩薩坐像を一見するに、この時代通例の右手に錫杖、左手屈臂して寶珠を持し、胸に瓔珞を懸けて僧形をなしているが、普通蓮花座に半跏趺坐する形態を破つて巖を象徵した木製の須彌座上に、結跏趺坐して禪定に入つた相好を示している。

この巖座は厚さ三寸、長さ三尺七寸二分、幅三尺四寸一分という長方形、四方足付きの臺上に、恰も風浪に浸蝕された巖もかくあろうかと思われる妙な寫實

を以て完成せられた高さ一尺六寸一分の一本造りの巖座を中心として、寄木造りの小岩を四方に配して形成せられている。中心の巖座は、本像よりも少々目の荒い布を生地に張り、黄土を塗り、彩色を施した形跡を顯著にとどめ、小岩は唯生地に青・黒色の彩色を施していたらしい痕跡を認める事が出来る。猶本像の像高は二尺八寸四分、寄木造りで玉眼を嵌し、彩色は殆んど剥落しているが、全體を細布にて覆い、

黄土にて堅めて彩色が施されていたらしい。特に光背は甚だ異例とも稱す可きもので二重圓光式、下部に光脚を有し、普通不動明王像にみられる如き火焰を周圍にめぐらし、上輪の中央は八葉蓮花を刻出し、頭光の中心部より放射状の光線を射出している。この光背の縁光部は寫眞に見る如く、現在殆ど彩色剥落の爲に明確にし得ないけれ共、退紅・黄・白色を残している點

より、白色顔料を下地として唐草紋様か、蓮花か、寶相華紋様等の花模様が彩色せられていたと想像せられる。猶周縁部には寶石模様の裝飾せるものを貼添し、光脚部は蓮瓣型に作られ、その一瓣ごとに繊細な氣風が感ぜられる點に、安元二年運慶によつて造像せられた圓成寺大日如來像光背の光脚に比して優美繊細な形式を見逃がす事は出来ない。

以上法華堂地藏菩薩像の現狀に就いて一瞥したのであるが、建長八年四月付の觀壽女寄進狀は、<sup>註二</sup>この地藏菩薩像の年代を決定する有力なる資料と思われる。今これを示せば

(端裏書)

クワンジユメノキシ  
(カ)ン狀 (カ)

敬奉寄進 法花堂地藏講僧前  
用途事

合米壹斗者 □講升定

在大和國宇下横田五反土々

品木貳段也

右志者深仰地藏薩埵之悲願、毎年五月廿四日地藏講僧前祈、限永代所令寄進也、彼貳段田相傳之輩無懈怠、可令段別伍升宛沙汰進者也、仍以地藏講之次、被轉讀阿彌陀經一卷、必訪二十五有之流轉  
依彼功力故、出車形輪廻之鄉、欲生花池寶閣之蓮臺、

仍所寄進狀如件

建長八年卯月

日

觀壽女

と、即ち觀壽女なる一女性が法華堂地藏講の僧供料として、下横田に在る田貳段より米一斗を永代にわたつて寄進するが、その代償として地藏講のついでに阿彌陀經一卷を轉讀してもらい、その功德に依つて花池寶閣の蓮臺即ち阿彌陀

淨土に生れたいと云う趣旨のものである。觀壽女がこの寄進狀に於いて明示している「毎年五月廿四日」の地藏講の僧供料として米一斗を寄進すると限定している事は、この地藏菩薩像の完成を意味しているのか、又は地藏講の設立を記念したものか、或は觀壽女の私的な事よりこの日を選定したのか、その邊は不詳であるが、恐らく五月廿四日は法華堂地藏講が尤も盛大に執行せられ、その日を選んで寄進したと想定せられる。

然し以上の文書に依つて我々は建長八年四月（1256）には既に法華堂内に地藏菩薩像が完成をみ、安置せられ、法華堂衆を主體とする堂方の僧侶と、一般信仰者によつて地藏講が成立していた事實を知る事が出来る。ここで再考す可きは、この地藏講と本尊地藏像との關係である。換言すれば地藏菩薩像が講の成立によつて即ち講の結成によつて完成をみたものであるか、將又本像の造像の完成を契機として講が道俗により結成をみるに至つたかの點であるが『地藏菩薩靈驗記』所收の祇陀林寺僧仁康の傳、『今昔物語』に散見する物語や、或は現在の講の成立條件より推定して、信仰す可き對象物が先行し、それに附隨して結成せられている場合が多い事を想えば、この場合に於いても地藏菩薩像が造像せられ、當時の地藏信仰の隆昌によつて講が組織せられたと考える可きであらう。

ここに興味ある點は、法華堂が興福寺南圓堂と同じく本尊が不空羂索觀世音像で、化佛は阿彌陀佛像であり、更に良辨僧正の念持佛と口傳せられ鎌倉時代相當の信仰をあつめ崇敬せられていた弘仁時代の彌勒菩薩坐像が安置せられていたから、地藏菩薩像の安置によつて象末二時の信仰對象物は正に完備したという事である。更に注意す可き點は奈良時代廣大な庄園領主として、その雄大を誇つた東大寺が攝關政治の確立と共に漸次没落し、鎌倉時代初頭に俊乗坊重源上人によつて寺領の復興がなされたけれ共、地頭、興福寺の侵蝕によつて、更に庄園内部の莊官の擡頭等に依つて財源は益々枯渇の一途を辿りつつあつた

當時、地藏菩薩像を造顯安置して、講を結成し民衆と連繫する事によつて新たな分野を開拓せんとした一例證として、その意義は非常に大なるものがある。

觀壽女が如何なる女性であつたかは史料の不足により明確にし得ないが、この地藏講は以後天正三年（1575）迄存続していた事は、大永四年九月（1524）<sup>註三</sup>

納所堂司辨弘より書き繼がれた『法華堂地藏講方納帳』により、或は永正三年八月の『舍利講堂司方諸所納帳』等により、年々、月の廿四日に行われていた事が知られる。<sup>註四</sup><sup>註五</sup>

當時は、約一石の收納米を以て十四人から十八人の僧の參懃によつて、この講が執行せられていたが、觀壽女寄進にかかる下横田の地より寄進された一斗米は、計上されて居らず、前記永正頃には既に退轉して居つた事が知られる。

以上の如く觀壽女の寄進狀及び前記納帳の示す處に依れば、この法華堂地藏菩薩像は建長八年四月を上限として以降天文頃に至る迄、地藏講の本尊として安置されていた事が明瞭にされた譯である。

### 三、作者と造像年代の推定

然らばこの地藏菩薩像の造像は何時頃にこれを求む可きであらうか。觀壽女の寄進狀の建長八年四月には既にこの像が地藏講本尊として存在していたからには、それ以前に完成せられていた事は否定し得ぬ所である。翻つて『東大寺續要錄』に依り鎌倉時代中期の主要なる造佛工事を概略すると、

建長元年十一月廿八日 戒壇院講堂丈六釋迦像供養行わる。

建長八年三月廿五日 大講堂本尊千手觀音像を、佛師康圓が湛慶の後を

承けて彫刻を行う。

同年三月廿八日 同講堂の脇土、虛空・地藏菩薩立像等佛師院實、

榮快、定慶、長快等により造像を始む。

その他建長二年九月には別當定親により釋迦三尊等を安置した新院（新禪院）が

建立をみる等、大小の造佛工事が猶行われていた事が知られる。殊に大講堂の本尊並に脇士二菩薩像の造顯に就いては、建長二年八月衆會しゅうかいを開いて、寸法形相に關する評定が行われ、<sup>註六</sup>先づ七條佛所湛慶を中心として本尊千手觀音像から造像が開始せられた。湛慶及びその一門が當時東大寺境内に止住し、その工を進めていた事は想像に難く無いところであろう。特に鎌倉時代中期建長頃に東大寺に七條佛所の佛師が定住していた事實は、この法華堂地藏菩薩像の作者を考定する上に重要な契機を與えるものと云えよう。

この地藏菩薩像は、作者を快慶に比せられる程に秀麗穩健なる相好を有し「戀の地藏」と迄、異名をとつていたのであるが、然し快慶の作になる公慶堂地藏菩薩像に比較する時、その莊重流麗なる寫實性に於いて、互に相通する點をもちつつも、その内部に包藏する躍動せる精神的氣魄と云う點に於いて、蓋し一籌を輸する事は、誰人もいなめぬ所である。だがこの像が所謂安阿彌系の作風を充分に繼承した佛師の作である事は首肯し得られよう。勿論嘉禎三年霜月(237)の造像銘を有する東大寺念佛堂の法橋康清の作になる地藏像や、建長六年六月廿二日に開眼供養の行われた福智院地藏像との間には、その作風、様式に於いて大きな差違が認められ、これ等によつて法華堂地藏像を論ずる根據には成り難い事は言う迄もない。作者に想定せられる佛師は、快慶の遺鉢を繼いだと推定せられている榮快である。現存する長命寺藏の地藏菩薩立像は、建長六年五月に造顯せられた彼の作品を雄辯に立證するものとして、最も人口に膾炙する遺品であるが「興福寺大佛師相承 今 東大寺大佛師 藥師寺大佛師三ヶ寺也」とその框座裏に墨書し、彼が當時、湛慶一門として、東大寺大講堂本尊千手觀音像の彫刻に従事していた事が立證される。前述の如く彼は建長八年三月より講堂脇士地藏菩薩立像を造像し始めたのであるが、安阿彌様の作風が地藏像の如き溫雅典麗をモットーとする像にあつては、最も契合する諸點を有し、彼が選ばれたと思われるのである。

果して然りとすればこの法華堂地藏像は、榮快が東大寺講堂千手觀音像彫刻に従事したと思われる建長二年八月以降より、觀壽女の寄進狀に見える同八年四月の間に造像したと想定し得よう。長命寺地藏菩薩像と法華堂像との兩者は立・坐像の形式的な差異、或は臺座・光背等に於いて根本的な形式上の差はみられるが、その顔部の伏目勝ちな相好と頭部の形式、即ち顚頂部より漸次頤部に至つて狭少に作られた長頭型の作風は、ほのかな笑みと共に、内攻性的な性格を窺わしむるに充分で、衣紋の起伏と俟つてそのみず／＼さが躍動している。

榮快の確實なる遺品が、長命寺地藏像を唯一の確證とする現在に於いては、法華堂地藏像との間に、その嚴密なる類似性を求める事は、輕率の謗りを免がれないけれ共、觀壽女寄進狀により、この像が建長八年四月以前に造像をみていた事實、更に快慶即ち安阿彌様の作風によつてゐる點より、作者を當時東大寺講堂の造佛に従事していた榮快到に假定する説を提示するに止めたいと思う。

#### 四、結 言

以上甚だ愚論に終始したけれ共、法華堂地藏菩薩像が建長八年即康元元年四月迄には、造顯せられ、既に地藏講が組織せられて、そのかみ官寺として隆昌を誇つた東大寺が、庶民階級と接觸する事によつて、地藏講の隆昌を計り、ひいては法華堂の經濟的地盤を獲得せんとした事が窺われるのである。勿論かかる民衆との接觸は大勸進俊乘上人以來代々の勸進僧や聖ひじりによつて、廣くおし進められたわけであるが、地藏信仰の隆昌にあつた當時代、地藏菩薩像を造像して講を結成し、更に法華堂に對する信仰を維持せんとした事も推定し得られる。又この像が儀軌を逸脱した結跏趺坐の形相をとり、光背に於いても火焰を有し、火宅を淨化する火を意味しつつ、猶その根柢には地獄の火焰をサヂエストすると云う甚だ類例なき形式をもつてゐる事に作者が非凡の佛師である事が

知られる。或はそのジャンルに於いて快慶的なものを有しつつも、快慶の透徹した意志、氣魄が乏しい事は否定出来ず、溫雅端麗なる相好に苔むす巨巖を象徴する巖座を配する事によつて、相好を一段と高めんとする意圖も感ぜられるのである。今觀壽女の寄進狀に依つて建長八年四月を以て、この像の造顯年代の最低下限とする事が實證せられたのであるが、更に當時東大寺に於いて造佛工事に従事しつつあつた佛師榮快にその作者を假定した臆説を提示し、後考をまちたいと思う。

註一 東大寺要録參照

註二 京都大學所藏東大寺文書

註三 東大寺成卷文書 弘長元年八月十八日信淨私領水田寄進狀に依れば彼女は藤原姉子と稱し字名を觀壽女と稱したらしく、弘長頃には尼となり信淨と名乗つていた事が知られる。

註四 東大寺圖書館藏

註五 十二月のみは十九日に行われ、僧供料は一人當り七合の割で支出されている。

註六 東大寺續要録造佛篇參照